海外だより

西ベルリンに滞在して

福　島　久　哲*

1986年9月から1987年12月末までの1年4か月間，西ドイツのフンボルト財団奨学研究員として，ベルリン工科大学（Technische Universität Berlin），カンメル研究室で研究に従事する機会を得た．ドイツの大学，研究機関の制度や研究の進め方などについては，既にこの“海外だより”欄でもたびたび紹介されており，筆者が滞在した西ベルリンでも基本的には同じである．しかし，西ベルリンは西ドイツ諸都市の中でも地政学上特殊な状況にある街であり，西ドイツを訪れても特に用事がない限り立ち寄られる方は少ないと思われる．そこで，ここでは最近の街の様子やベルリン工科大学について報告することにしたいが，まず，筆者がお世話になつたフンボルト財団について簡単に紹介させていただく．

フンボルト財団とは，18～19世紀のドイツの偉大な科学者 *Alexander von* Humboldt の遺志によつて1860年にベルリンで設立されたもので，ドイツ人自然科学者が外国調査旅行を行う際の資金援助を行つていたが，その後の2度にわたる世界大戦によるインフレによつて財団の資産は無に帰してしまつた．現在の第3次フンボルト財団はその資金の大部分を西ドイツ政府が拠出し，若手研究者育成のため，毎年約400名の世界各国の研究者に西ドイツ各地の大学，研究所で研究する機会を与えている．財団はフンボルトの遺志によりこれら奨学研究員に対し，研究報告書の類はもちろん一切の義務を課さず，“研究成果は学会誌に投稿し，掲載されれば財団としては望外の幸せである”といつたところは大いに見倣うべきであろう．しかも，研究以外に地域別および全国規模の各種行事に招待してくれ，各国からの奨学研究員間の交流を図るとともに，いろいろな観点からドイツという国を知つてもらおうという細かな配慮がなされている．かくして各奨学研究員は財団に大いに感謝すると共に，ドイツという国を大好きになつて帰国することになる．我が国は歴史的にドイツとの関係が深く，そのため1953～1983年の30年間の我が国からの奨学研究員数は1231名（全体の14.5%）と2位のアメリカ（928名，10.9%）を抜いて最大である．40才以下で研究に従事している者であれば誰でも応募資格があるので，多くの方々にフンボルト財団に応募されるよう勧めたい．

周知のごとく第2次大戦後ドイツは米英仏ソの戦勝4大国により分割占領され，同時に首都ベルリンもこれとは別に4大国の軍隊により占領された．その後の東西世界間の冷戦激化を経て，英米仏による占領地域はドイツ連邦共和国（西ドイツ，BRD）として，ソ連による占領地域はドイツ民主共和国（東ドイツ，DDR）としてそれぞれ東西両陣営に深く組み込まれ，基本的に体制を異にする二つの国になつた．そしてベルリンも東西に分割され，英米仏による占領地区は西ベルリンとして，東ドイツ領内に壁に囲まれて孤島のごとく残され，今日に至つている．

二つのドイツ成立当初は両国とも“一つのドイツ”を目指していたが，東ドイツはその後“二つのドイツ”に方向転換したため，東ドイツは西ドイツを外国であると見なしているのに対し，西ドイツは東ドイツに対しドイツという一つの国の中に二つの政府が存在する特殊な関係にあると考えている．そのため，ドイツ分断の例としてよく引き合いに出されるベルリンの壁を含めて両国間の境界線に対する両政府の見解は異なつており，西はこれらを単なる州境，市境と考えているのに対し，東では国境と考えている．従つて，西ベルリンから自動車や鉄道で東ドイツ領を通り西ドイツへ行く場合は東側による厳重な出入国審査があり，トランジットビザが必要であるが，西側による審査は一切行われない．ベルリンの壁を通り東ベルリン日帰り観光に行く場合も事情は同じで，この壁と東側が設けた検問所の通過がベルリン観光の最大の目玉となつている．

先に述べたような地理的特異性のため，西ベルリンはその経済的価値をほとんど無くしてしまつた．フランクフルトなど西ドイツの都市が高層ビルが林立する近代都市へ変貌しつつあるのに対し，大戦によつて破壊され今は正面壁の一部を残すだけとなつたかつてのベルリン最大のアンハルター駅の広大な面積が街の中心付近に放置されているなど，西ベルリンはいまだに先の大戦の傷跡を生々しく残している．この駅跡には連合軍の空襲に備えナチが建造した巨大なコンクリート製シェルター（ブンカーという）がそのあまりの堅牢さゆえに取り壊せず放置してあり，かつてはこの駅からヨーロッパ各地へ向かう列車が頻繁に通つたであろう何本もの線路が雑木に埋もれている．その一方で，東側に対する西側世界のショーウィンドー，自由のシンボルとしての西ベルリンの政治的価値は高まることとなり，連邦政府は多くの文化施設を設けたり，種々の優遇策を弄して，この地に多くの人が集まるよう奨励しており，人口が200万人を切つたとはいえ現在でも西ドイツ最大の都市である．歴代米国大統領の多くはこの地を訪れ，自由社会の繁栄を謳う演説を行つている．筆者の滞在中にもレーガン大統領がベネチア・サミットからの帰途立ち寄り，東西の接点として最も象徴的な地点であるブランデンブルグ門においてソ連のゴルバチョフ書記長に対し，“Wherever I go, Whatever I do, ich habe noch einen Koffer hier in

* 九州大学　工学部　工博

Berlin" と米国大統領は常にこのベルリンに大きな関心を持ち続けていることを示すと共に，"If you seek peace, if you seek prosperity for the Soviet Union and Eastern Europe, open this gate! Tear down this wall!" と呼び掛けた．

このような東西両陣営の接点である西ベルリンに住んでいると，社会主義の社会を垣間見る機会が多く，何かにつけて自由社会と比較してみることになる．どちらが良いかは意見の別れるところであろうが，壁の一方側では経済建設の立ち後れは蔽うべくもない．1961 年のソ連軍と東ドイツ人民軍による壁の建設以来，現在でも東から西への逃亡を試みる人は後を絶たず，東ベルリンへの検問所の一つである Checkpoint Charlie 横の博物館（日本人観光客は壁ミュージアムと呼んでいる）に行くと，いかに多くの人々がありとあらゆる手段によつて自由を求め西側へ逃げて来たか良くわかる．

さて，連邦政府の政策もあつて，西ベルリンは西ドイツにおける学術研究の中心地の一つになつている．学術研究の最も重要な担い手は大学であるが，西ベルリンにはベルリン自由大学（学生数約 5 万人），ベルリン工科大学（同 26 000 人）を始めとする 10 の大学があり，マックス・プランク分子遺伝学研究所，フリッツ・ハーバー研究所，ハーン・マイトナー核研究所など数多くの国立研究機関が所在している．西ベルリンの大学に学生登録すると兵役が免除されることもあり，多くの学生が集まつている．少し古い統計で恐縮であるが，1982～1983 年の冬学期における学生総登録数は 88 500 人と同時期のミュンヘンの 82 500 人を上回つている．この中で外国からの留学生の占める割合は約 10%（工科大学では最近 18% に増加）で，筆者の周囲ではトルコ，イラン，ギリシャからの学生が多かつたが，最近の傾向として，中国人留学生が急増しており，この事情は我が国でも同じである．

筆者が世話になつたベルリン工科大学は 22 の専門領域（Fachbereiche，我が国の学科より少し大きい規模）で構成されており，人文科学，社会学など文系学部のものから数学，物理など理学部系，そして土木，建築，電気系など工学部系や農業，食品化学など農学部系の専門領域まである．西ドイツの大学は民間企業と密接な関係を持つているのが特徴であるが，ベルリン工科大学もその例に漏れず，独自の研究を行うことのできない中小の企業に研究成果や研究能力を提供するため，最近学内にテクノロジー転換所やベルリン企業育成センター（ベルリン市庁と共同）を設置している．教官数約 660 名で，助手などの研究教育職を併せ約 2 000 名の職員で研究および学生の教育にあたつている．筆者のホストであつた Kammel 先生は FB 17 材料科学の金属製錬学講座（Institut für Metallhüttenkunde）を担当しており，来日歴 10 回以上の大の親日家であるので御存じの方も多いと思う．その他，鉄冶金の Oeters 教授や鋳造工学の Höner 教授など我が国でも馴染みの深い先生方が近くにおられた．Kammel 教授は一時期内蔵を悪くされ入院生活を送つておられたが，筆者が渡独した時は既に退院して現場復帰されており，相変わらず多忙な毎日であつた．入院前に比べ体重が 10 kg ほど減つたので，これが増えないように非常に気を使つておられ，パーティーなどではあまり食物には手を出さず，アルコール類も控えておられたが，興に乗るとワインのグラスを何杯も傾けられ，元気いつぱいであつた．

紙面も残り少なくなつたので，西ベルリンに開設され昨年開所祝いが行われた財団法人"ベルリン日独センター"についてお知らせして終わりにしたい．街の中心部に広がるティアガルテンの森のそばにある旧日本大使館は戦後長い間破壊されたまま放置されていたが，昨年（1987）ベルリンが開市 750 周年を迎えるにあたり，記念事業の一環としてこの我が国所有の建物を修復し，日独の"知的出会いの場"を設けることとなつた．我が国は総工費 40 億円（国庫から 30 億円支出，残りの 10 億円は民間からの寄付金）を負担して建物の修復を行い，一方ベルリン州政府が 1 500 万マルクを拠出して財団法人"ベルリン日独センター"が誕生した．建物の修復は黒川紀章氏の指導により 1986 年 2 月から始められたが，昨年中に内装工事までは終了できず，本年 3 月完成予定ということであつた．ただし，ベルリン開市 750 周年記念事業であるので昨年中に開所する必要があり，昨年 11 月 8 日，浩宮殿下を迎え，開所式が盛大に執り行われた．本センターの活動の主目的は日独および日欧の学術交流の促進であり，各種セミナー，学術会議等を可能な限り開催し，未来を指向する研究を行う場とすることが希望されている．そのため，東大工学部，京大法学部，ベルリン自由大学およびベルリン工科大学から一人ずつ選ばれた 4 人の教授で構成される委員会が設置され，学術交流の具体的方策について検討が続けられている．Kammel 教授も委員の一人であり，近い将来我々関係の会議がこのセンターで開催され，再び西ベルリンを訪れるのが楽しみである．

すべてが凍てつく灰色の冬からほんの 1 ～ 2 週間で木々は芽吹き花が咲き乱れるという急激な春の到来，ショッピング客で賑わうクーダム通りの鈴懸けの並木の下で学生達と食べたヴルストとピルツェン・ビア，あてもなく散策したティアガルテンやグリュウネバルトの森，ドイツ各地や近隣諸国への気ままな旅・・・自由な雰囲気の中の研究生活と共にこれら貴重な体験をする機会を与えて下さつた方々に心より感謝申し上げる．